

---

# マレピト来たりて 前編

安積

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マレビト来たりて 前編

### 【Nコード】

N0495BA

### 【作者名】

安積

### 【あらすじ】

典型的異世界トリップ……なんだろうけど、何でこの人たちこんなに異世界人慣れしてるわけ？

数ヶ月という短周期で異世界から人やら何やらがやってくる世界に、何の因果かやってきてしまった日本人が、何とか順応しようと頑張って生きていく話。

同名投稿小説の、改行修正、分割話統合版です。第6章分までをこ

こちらにまとめていきます。内容は全く同じです。

## 序章

勢い込んで家を出た、初出勤のその日。

慣れないスーツに着られてる感は否めなくても、それでもやる気だけは一杯で。

意気揚々と家を出た。

ほんの少しの不安と緊張とそれに勝る多大な好奇心を胸に。

それなのに。

どうして私は一異世界　ここに　いるんだろう？

意外に落ち着いてるもんだよね。

ただの娯楽でしかなかったファンタジー小説もこんな風に役立つことがある訳か。

予備知識も何にもなしにいきなり異世界に来ていたらきつとパニックを起こしてただろう。

もしかして、昔から神隠しの話があったのってこういう現象に巻き込まれる人が実際にいたからなんじゃないだろうか？

となると、あくまで楽観的な予想に過ぎないけれど、場合によっては帰れることもあるわけで。

でも、逆に言えば万が一どころでなく低い確率だけど、ここから更に別の世界に行ってしまう様な可能性もある訳か。

二度あることは…とも言出し、とりあえずは帰れるかもしれないけどこの世界での生活の目的をつけることが重要かな？

となれば、まずは職探しか。

……結局、辛い就活から逃れられてもまた職探しな訳ね。  
この世界にハローワークみたいなものはあるのかな？

異世界初日。

訳の分からぬままに保護された神殿で、空に浮かぶ7つの月に眩暈を覚えながらも、微妙に現実逃避をした脳は眠りという精神安定剤の補給に異議を唱えはしなかった。

何の因果か異世界に来て、早1週間が経過した。因みにこの世界での1週間とは6日のことで1月は24日である。

まあ、それはどうでも良いが、何とか現状を把握し慣れてきたかな、といったところだ。異世界トリップものでは時たまあるバージヨンだが、この世界は「渡り人」に慣れてきているようだ。「渡り人」って言うのは私のような異世界からやってきた人々の事らしい。

別名「マレビト」。

これはこの国、アウトラーシェン周辺でだけ通用する言い方らしく、あまり一般的ではないのだそうだ。

話が逸れたが、何でも、毎年或いは数年に一度何処かしらには「渡り人」が現れるのだとか。しかもこの国だけじゃなく、他の国でもそうらしい。恐らく、この世界全体で見れば数ヶ月周期で渡ってくる人がいるのではないかと、私を保護してくれた神官が教えてくれた。しかも、やってくるのは一つの世界に限らないらしい。私と同じように地球から来る人もいれば、別な世界から渡ってくる人もいるとのこと。人に近い種もいれば、所謂獣人やら竜のような生き物である事も。人種の坩堝やサラダボールなんて比ではない。

ある人はまるでゴミの集積場だ、と自嘲気味に言ったらしいが。どうしてこんな事になっているのかは大分前に判明している。嘘か本当か定かではないが、かつて神託が下ったのだという。

曰く、この世界に必要でありそうな人材を見繕って集めているのだ、と。

世界で生まれた人たちも元を辿ればそうやって集められた人たちの子孫なんだとか。この神託を受けたのは特に信仰心が篤いというわけでもない、どこにでもいそうなおっさんで、神託を受けてからの開口一番の言葉が「余計なお世話だクソっ垂れ」だったと伝わっている。なんでも、神託が下る前年に新たにこの世界に落とされた

竜によって最愛の息子を殺されたばかりだったとか。

神と人間の価値観は違う。人にとってはふざけたことでも、神にとってはこの世界が完成するのに必要な処置だったという事だろう。今でこそもつと積極的にこの世界に関わりを持つている神だけれど、このときはまだ意外と放置気味だったらしい。それにも拘らずこの話が信じられたのは、そのおっさんのように神なるものももし実在するならば確実に恨んでいるだろう人々を中心にその神託が下ったからだ。一人が言っただけならただの戯言でも、証人が複数いれば信用される。多くの証言者がいながら、何故かその中には一人も聖職者がいなかった。それ故、なぜ自分に託宣を下さらなかったのかと嘆いた聖職者も多くいたとか。

私が思うに、信心の篤い聖職者に神託を下したところで信憑性が薄かったり、変に歪められてしまうと心配したんじゃないだろうか。どことなく、この世界の神様は人間臭い気がした。とにかく、それらの証言の数々は神殿に集められ、一冊の本としてまとめられた。今では世界中の誰もが知っている内容だが、世界は変われども噂とは人の口に膾炙されやすいものらしく、実は公にされてない神託があるのだ、世界の終末の預言があるのだの様々な都市伝説も合わせて広まっているらしい。

この手の噂を最初に広めたのはアメリカ人の「渡り人」ではないかな、と思ったりするが、それは私の勝手な想像だ。でも、アメリカ人ってそういう政府陰謀系の都市伝説好きだよな。

まあ、伝聞が多くなったがそんな訳で「渡り人」たちはこの世界では当たり前前の存在なのだ。だから「渡り人」を迫害したり逆に優遇したりするような事はないが、普通に生活していこうと思えばそれほど困りはしないだけの制度作りはされていた。

「渡り人」が世界に必要な存在であると神から言われていることもあり、まずは何が出来るか、どのような知識や技術、能力を持つ

ているかという事が調べられる。そこで特別なものを見出されれば、研究機関やら何やらで仕事につく事も出来るが、そういう人物はあまり多くはない。大抵はギルドにて自分のできる仕事を斡旋してもらつ事となる。

そう、ギルドだ。

異世界トリップおよびファンタジー世界のファンが垂涎のギルドである。もしかしたらこの仕組みはゲームやラノベ好きな地球人が考えたんじゃないのか、と思うほどその手のギルドに良く似ている。間違つても、中世以後のヨーロッパでの商工会としてのギルドのあり方ではない。

何と言つるか、分かりやすく現代の言葉に直すなら職業斡旋所…といてもハローワークではなく、人材派遣会社とでもいった感じだろうか。そうあれだ、携帯ですぐ登録、週末には日雇いのバイトというグツ　ウイ　やらモ　イトやらそんなのとよく似ている。

ギルドに登録したら、自分が請けることの出来る仕事の候補の中からやりたいものを選んで仕事に行き、仕事が終了したらまたギルドに戻って報酬を得る。安定した生涯雇用（バブル崩壊以後有名無実となつてはいるが）が当たり前だった現代日本人からすれば、職業に貴賤はないというものの、日雇い労働者というのはかなり心理的抵抗のある職業である。というか、そうならなかったためにも大学まで苦勞して通つて、就職難が叫ばれる中、それでも頑張つて内定を得て、何とか無事に卒業して、今日から初出勤！という日に異世界なんぞに落とされて、拳句に別段特出した能力もないようだから日雇い労働に甘んじろ、というのはハツキリ言つて、神がいるものなら極刑ものだと少なくとも私は思う。

それでも、生きてく為にはそれしか出来ない。この中世的世界、安定した雇用を得るにはコネと伝手が何よりの頼りなのだ。異世界からやってきたばかりの根無し草にそんなものはない。ギルドでコツコツと信用を溜め、誰か自分の能力を買ってくれる人を見つける

か、売り込んでいくしかない。

と、まあ。

異世界に落ちてきてから保護された神殿で、1週間くらい掛けて色々教えてもらったり調べられたりして現状を把握する事は出来た。短い時間ではあったが保護される期間は今日で終わり、明日からは私の身は神殿ではなくこの区域担当のギルド預かりになるらしい。結構無茶な話だと思うだろうが、これらは良くも悪くも私たちのためのことなのだそうだ。何も知らないまま放り出すわけには行かず、かといって長い時間保護してしまえば自立しこの世界に馴染む力をなくしてしまう。ある程度落ち着いて自分の状況を把握して、且つ自分で世界に踏み込んでいく力も持っている。その微妙なラインが凡そ1週間だったのだという。これは神々がある程度、順応性やある意味での凶太さをもった人間を選別しているからこそできることらしい。つまり、この世界に来てしまった私にとってはも凶太い神経の持ち主だという事を証明されたようなものである。これを言われたときは流石に少なからずショックを受けた。もしかしたら、この世界に来てしまったということ以上のショックかもしれない。

……恐らく、こういうところこそが私が選ばれてしまった所以の一つなのだろう。

明日、朝になれば私は神殿の庇護下を離れ、異界の地で自ら歩く術を身に付けていかなければならなくなる。当分、心休まる日はないだろう。こういうときは体力温存に限る、とばかりに異界の夜に浸るまもなくさっさとベッドに潜り込む。新生活への多大なる不安と若干の好奇心と興奮を闇は飲み込み、夜は静かに更けていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0495ba/>

---

マレビト来たりて 前編

2012年1月2日06時47分発行